井上 智＝アルバム『メロディック・コンポジションズ』発売記念ツアー

Satoshi Inoue Quartet "melodic compositions"

愛器エイブ・リヴェラから泉のように溢れ出る繊細かつ豊潤なメロディ

ジム・ホールやロン・カーターからも、その実力を高く評価される井上智が、最新アルバムの発売記念ツアーを行なった。ニューヨークを拠点に活動する百々徹、植田典子に加え、若き天才ドラマー横山和明をフィーチャーしたスペシャル・クアルテットの横浜公演の模様をお伝えしよう。

取材：石澤功治
撮影：土居政則

ジャズの本場ニューヨークで長きに渡って活動を続けてきた井上智が、5枚目のリーダー作『メロディック・コンポジションズ』を引っ提げて、7月4日から19日まで日本各地を回った。ここではツアー終盤の7月18日に行なわれたモーション・ブルー・ヨコハマでのステージの模様をリポートする。

今回、井上のギターをサポートするのは先に挙げた最新作のレコーディング・メンバーの面々。ピアノの百々(どど)徹と、紅一点のベースの植田典子のふたりは、井上と同様に現在ニューヨークで活躍している実力派。ドラムは、弱冠17歳で渡辺貞夫のツアー・メンバーに抜擢されて話題を呼んだ現在21歳の横山和明と、日米問わずにいずれ劣らぬ注目株が揃った格好である。

この日のファースト・セットで演奏された6曲は、すべて『メロディック・コンポジションズ』に収録されている井上のオリジナル・チューンで、まずは軽快な3拍子のナンバーからスタートした。井上が使用したギターはエイブ・リヴェラの特注モデル。硬めのトーンながら、奥行きの感じられる深めのサウンドが場内を一瞬にして包み込んでいく。ちなみに、そのエイブ・リヴェラのシールドの先を追ってみると、つながっていたのはなんとベース・アンプ(!?)。あとで本人に訊ねたところ、どうやら間違って届いたとのこと。それでも平気な顔して弾いているばかりか、余裕すら感じられるその姿に、さすがニューヨークの第一線で活躍しているだけのことはあるなと、妙なところで納得してしまった。

続いてステージは、ボサ・ノヴァ・テイストの2曲目へ。ここでは百々のピアノがフィーチャーされ、知的でありつつもエモーショナルなソロを展開していた。3曲目はカバ(ヒポポタマス)の動きをモチーフにしたアフリカン風のナンバーで、ドラムの横山の斬新なアプローチがバンドに新しい風を送り込んでいたのが印象的。4曲目で井上のギターの美しいバラッド・プレイを堪能した後は、各メンバーのソロが与えられたドラマティックな5曲目へと流れていく。この曲の出だしで横山はドラムを素手で叩くアプローチを披露。植田の安定したベース・ソロも聴き応え充分。中でも百々のピアノ・ソロのラスト部分では、あのスティーヴ・キューンを彷彿させるものがあって素晴らしかった。ラストの『プン・プン・タキタ』はタイトルもユニークなら、リズムも変想もユニークな7拍子の中近東風ブルースで締め括られた。

とにかく井上のギターの最大の魅力は、その歌心にある。シングル・ノートを弾こうが、オクターヴ奏法を弾こうが、コード・ワークをやろうが、決して奇をてらうことなく、かといってテクニックに走るわけでもない。いつも彼のプレイの根底にはメロディが存在する。彼の演奏に人間的な温かさが満ちあふれている最大の所以ではないだろうか。それは今回のアルバムのタイトル『メロディック・コンポジションズ』からも伺える。

その井上を軸に、彼と同様ニューヨークにしっかりと根を張って精力的に活動している百々、植田から繰り出される斬新かつ安定した音の息吹。さらに若き横山の新しいセンスを持ったドラミング。それらが絶妙にブレンドされたサウンドに心酔させられたステージだった。■

7月18日(金)
モーション・ブルー・ヨコハマ

MEMBER
井上 智(guitar)
百々 徹(piano)
植田典子(bass)
横山和明(drums)

SET LIST
①スリー・フォー・ジョー・ハウス
②アプリル
③ヒポポタマス
④ドリーム・オブ・スターライト
⑤カムズ・ウィンター
⑥プン・プン・タキタ
すべてアルバム『メロディック・コンポジションズ／井上 智』収録曲

新作『メロディック・コンポジションズ』のレコーディング・メンバーによるアルバム発売記念ツアー。ニューヨークを拠点に活動する、気心の知れたメンバーが中心なだけに、横浜のステージでもそのコンビネーションの良さが際立っていた。